

研究課題：義歯による欠損補綴が高齢者の栄養摂取に与える効果

研究者名：駒ヶ嶺友梨子¹⁾，金澤 学¹⁾，浜 洋平¹⁾，山賀栄次郎¹⁾，堀江 毅¹⁾，山田理子¹⁾，鈴木啓之¹⁾，水口俊介¹⁾

所属：1) 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科，高齢者歯科学分野

【緒言】

これまでの研究から，歯の喪失により栄養状態が悪化すること，また栄養状態が不良であると，心疾患や脳卒中の罹患率が増加することが明らかになっている．これは歯の喪失により緑黄色野菜や果物の摂取量が減少することが原因と考えられている．歯の喪失は欠損補綴によって咬合回復が図られるが，この欠損補綴によって栄養状態が改善するというエビデンスは少ない．そこで本研究では不適合義歯装着者または，義歯が必要であるが未装着者に対しての義歯新製が，食品摂取状況と栄養状態へ与える影響を明らかにすることを目的とする

【方法】

東京医科歯科大学歯学部附属病院の義歯外来の患者で，義歯の再製または新製を希望している患者で欠損様式がアイヒナー分類 B2～C2 群である者 23 名（男性 8 名，女性 15 名，平均年齢 68.4 歳）を被験者の対象として，新義歯装着前後で MNA を用いた栄養状態評価，BDHQ を用いた栄養素・食品摂取状況評価，OHIP14 を用いた口腔関連 QOL 評価，内田らの食品摂取可能品目質問票を用いた主観的咀嚼能力評価，色変わりガム（ロッセ），検査用グミゼリー（UHA 味覚糖）をそれぞれ用いた客観的咀嚼能力評価を行った．

【結果】

新義歯装着後から術後評価までの期間の平均日数は 43.2 日であった．MNA による栄養状態評価と BDHQ による 54 種類の栄養素摂取状況評価は術前と術後で有意な差は認められなかった．また BDHQ による 69 種類の食品摂取状況評価のうち 4 種類の食品について術前と術後で有意な差が認められたのみであった．口腔関連 QOL については術前と術後で有意に改善が認められた．また主観的咀嚼能力評価は有意な差は認められなかったが，客観的咀嚼能力評価のうちグミゼリーを用いた評価法では有意に咀嚼能力の増加が認められた．

【考察】

義歯の新製によって術後の口腔関連 QOL と客観的咀嚼能力評価に有意な増加が認められた一方で，栄養素と食品の摂取量にはほとんど改善が認められなかったが，過去の研究において義歯新製に加えて食事指導を行うと栄養素や食品，特に野菜や果物の摂取量が増加することが明らかにされている．よって今後の研究として，食事指導を加えた欠損補綴が栄養素や食品摂取に与える影響の検討を考えている．